

不思議な場所の物語

リユドミフ・ペトルシエフスカヤ著、沼野恭子編訳

『私のいた場所』

河出書房新社 二〇一三年八月

初めてペトルシエフスカヤを読んだ時の衝撃は忘れられない。彼女の出世作『時は夜』（一九九二）は、刑務所帰りの息子とだらしないう娘、頭のおかしい老母をかかえて貧乏生活を送る女性詩人の手記という体裁の長編小説で、ソヴィエト社会の暗部を描いた問題作という触れ込みだったが、主人公の偏質狂的でとどまるところを知らない怒涛の語り口がとにかく圧巻で、確かに彼女の置かれた境遇はどうしようもなく悲惨ではあるものの、それより何よりその文体の持つ破滅的な疾走感にむしろ痛快なほどであり、作品の孕む底知れない生命力にたまたまう圧倒されるばかりだった。

この一作で一気にその名を知られることになったペトルシエフスカヤは、その後も旺盛な創作力を発揮し、幻想小説、怪奇譚、童話、寓話など、幅広いジャンルの作品を発表し続けている。ソ連崩壊後のロシア文学を代表する一人であると誰もが認める彼女も早や七十代後半にさしかかり、そろそろ「文壇の重鎮」的なポジションにおさまるなり、作家生活の黄昏期に入るなりしてもよさそうなものだと思いきや、そのような予定調和的展開を裏切るのがペトルシエフスカヤである。老齢を迎えてからなぜか突然歌に目覚めた彼女は、今や国内外のクラブや

ホールでコンサートを開くプロの「歌手」でもある。そのライブの様子はYouTubeでも見ることができているが、どこことなく彼女を思わせる容貌の彼女がシックな衣装に身を包み、ジャズやシャンソンの名曲のカバーや自作曲を気持ちよさそうに歌いまくる姿は実に印象的だ。

さて、本書はそのペトルシエフスカヤが二〇一〇年の世界幻想文学大賞（短編集部門）を受賞した『私のいた場所——別の現実の物語』を中心とした全十九編の短編小説アンソロジーである。タイトルからもわかるように、これは現実の裏側にある「もう一つの世界」の物語だ。ごく平凡で目立たない人々が、ふと気づくと現実世界の境界線を踏み越えて異界に引き込まれ、生と死が隣り合わせに接する奇妙な世界で摩訶不思議なストーリーが紡がれていく。

たとえば表題作『私のいた場所』では、主人公ユーリヤが昔馴染みのアーニャおばさんの家を訪れるが、どこか様子がおかしい。どうやらアーニャおばさんはすでに死んでいて、ユーリヤは生と死の境界領域をさまよっているらしい。ごく普通の風景が次第に違和感を増し、現実が非現実にすり替わっていく過程は、不気味でもあり夢を見ているようでもある。

現実と幻想、此岸と彼岸、生と死との境界線は私たちが普段思っている以上にあやふやで、知らず知らずのうちにその両方の世界を行き来することもあるのだというのは、本書に収録された全編を通じてのテーマである。ユーリヤは最終的に「生の世界」に戻ってくるのだが、「あちら側」へ行ったまま帰ってこない者もいる（『ふたつの王国』）。あるいは、死にゆく者を取り戻そうとして境界領域に足を踏み入れることもある（『噴水

のある家」)。逆に、死者の側が「生の世界」にやってくる場合もある。『母の挨拶』や『生の暗闇』では、現実世界で苦境に陥った者たちが、死んだはずの家族によつて救われる。一方、戦死した夫が妻の元を訪れ、森へといざない自分を埋葬させる『ソコリニキの出来事』は、死者の方が生者の助けを借りるパターンだ。これだけ頻繁に死者と生者が往来し合っていると、もはやどこからどこまでが「生の世界」で、どこからが「死の世界」なのか、はつきりと区分することなどできなくなる。「私のいた場所」は私が今いる場所でもあり、「現実」と「別の現実」が重なり合つて不可思議な物語世界を形作っている。

ホメロスの『オデュッセイア』やダンテの『神曲』、あるいはオルペウスの冥府下りにインスピレーションを受けた様々な文学作品を例に引くまでもなく、「冥府との交通」を描くのは文学史上珍しいものではなく、むしろ定番とも言えるジャンルである。それは「非合理的な現象を自在に扱うことのできる最も自由な物語空間」（訳者あとがき、二二五頁）であり、だからこそペトルシェフスカヤもこのジャンルを偏愛するのだろう。ただ、伝統的な「冥府下り」の枠に収まらないのが彼女の真骨頂で、予定調和をあえて崩すかのような非論理的なプロット展開もその一例である。

たとえば不本意な結婚をした男ワシーリイが主人公の『新開発地区』は、最初のうちは愛のない夫婦を描いたよくある物語のように思われる。だが、二人の間に娘アリオヌシカが生まれると、ワシーリイは思いがけずこの娘を深く愛するようになる。しかし話はそれだけでは終わらない。「可愛いアリオヌシカはみるみるうちに大きくなり、黒髪で父親そっくりになっ

た。〔中略〕ワシーリイは娘をととても愛し、人殺しをした大晦日の夜も、あと一息で妻を殺すというところまでいって、折悪しく娘が泣きはじめたので娘のところへ行き、あやして寝かしつけてから、浴室の妻のところへ戻つてとどめを刺したくらいだった」（八五頁）。何の伏線もなく唐突に殺人が行われるこの衝撃的な一文の後、ぞつとするほど淡々と妻の殺害と死体遺棄の場面が描かれる。身元を隠すために妻の指を切断してから遺体を捨てに行つたワシーリイは、やがてその切り落とされた指が水道管から出てくるといふ幻覚にとらわれ狂気に陥つていくのだが、このジェットコースター並みの急展開ぶりがペトルシェフスカヤらしい。

また、異界を描く時にも妙なりアリティイを感じさせるのも彼女の特色と言えるだろう。死にかけた娘を取り戻そうとする父親を描いた『噴水のある家』では、父が夢の中で生の心臓を食べ、口の中にあふれる血で黒パンを胃に流し込む場面があるが、まるでその血や臓物の味が舌の上に広がるような生々しさを感ぜさせる。

ところで、「訳者あとがき」でも指摘されているように（二二三頁）、本書の登場人物は死と生の世界を往来する際、しばしば「夢」を見たり眠ったりしている。生者が生きながらにして「別の現実」を体験できる「夢」の世界は、言わば死と生をつなぐ境界領域を象徴する場であるが、ペトルシェフスカヤの作品自体、どこか「夢」に似ているとは言えないだろうか。論理的つながりを無視して跳躍するプロットや、それでいて妙に生々しい肌触りがあるところなど、「夢」を思わせる点は少なくない。本書を読み終えた後、まるで不思議な夢を見て目覚めた直後の

ような感覚を覚えるのはおそらく私だけではないだろう。

時にグロテスク、時に荒唐無稽なペトルシェフスカヤの「夢」の世界。しかしどれほど不気味な「悪夢」であつても、なぜかその読後感にはネガティブなものではないし、また、境界線の裏側にどれほど醜悪な現実があるかと、「夢」への旅は単なる「現実逃避」にはならない。それはおそらく、不条理で非現実的な幻想小説においても、抑えがたく執拗な生命力がペトルシェフスカヤの作品には息づいているからである。

たとえば『母さんキャベツ』では、キャベツから生まれた小さな娘キャベリーナ（ちなみにこの名前の訳し方は絶妙である）の母親が、おそらくはキャベリーナの生まれ変わりともしき不器量でみつともない赤ん坊をバルコニーで見つけた後、最初は愛するキャベリーナがさらわれたと思つて激しく泣きじゃくるのだが、「突然、何かの内側から胸を叩いたような気がし」て（一〇八頁）、ごく当たり前のようにこの赤ん坊におっぱいをあげる場面が作品の終盤にある。かつて彼女が墮胎した子の化身のような存在であるらしいキャベリーナという薄気味悪い幼女をめぐるこの奇譚は、こうして最後の最後で一転し、母親の内部から湧きあがる生の力を浮かび上がらせることになる（しかしキャベリーナの代わりに現れた新しい赤ん坊も、やはり最後までどこか気味が悪いのだが）。

あるいは、姿を見せない何者かが家の中にいる、という妄想に取りつかれた女を描いた『家にだれかいる』の結末を思い出してみよう。家を破壊しようとする見えない「あいつ」の先手を打とうと、主人公の女は家中の物を次々と壊していく。家が崩壊していくのと比例して彼女の飼うネコは生気を失い、まる

でミイラのようになるのだが、最後の最後で衰弱しきったネコがふと思ひ立ったように「すつくと起き上がり」、エサを口に「生きていくことにしたのである」（四五頁）というさりげない締めくくりの一文は、ペトルシェフスカヤという作家の持つ根源的な逞しさを象徴しているようで印象深い。主人公の女は名前が明示されていないのに、ネコには「リャーリャ」という人間臭い名前が与えられているアンバランスさも、この結末からするとおそらく意図的なものだろう。

思えば、『時は夜』も、とめどなく進む生命力の強さが創作のダイナモとなっていた。そして、老境に至つてもなお「歌手」という新しいジャンルに挑戦しないではいられないペトルシェフスカヤの人生それ自体もまた、同じダイナモに突き動かされているのではあるまいか。彼女には今後も、さらに予定調和を裏切り続けてくれることを期待せずにはいられない。

（前田和泉）